

あなたの相棒



人間誰しも、大切な人・物・場所があるはず…。府立生野高校写真部の皆さんと一緒に、そんな誰かのかけがえのない「相棒」を紹介します。第24回は、一津屋にあるお寺、「法泉寺」十八代目住職の恵我了悟さんです。

初めて感じるお寺という場

「法泉寺」は室町時代末期から続く浄土真宗のお寺で、了悟さんで十八代目になるそう。入り組んだ住宅街の中にこんなに由緒あるお寺があることに驚いた。まずは日課をお尋ねしてみた。「平日は、朝、本堂でお勤め（読経）をした後、お檀家さんのお宅への月参り。日によって色々やけど、平均すると十件ほどかな。それだけでもあつという間に一日が終わってしまいます。法事は土日を中心に行われるので、月に二度ほどしか休みはないですね」そんないそがしい毎日の中、了悟さんは仕事と趣味を兼ねて、「笙」をお吹きになると言う。「笙」って何だろう？ ちょっと無理をお願いして、演奏し



ていただく。初めて聴く音色はすごく繊細で、普段は耳にすることのない不思議な響きだった。和音が何とも心地良い。

お寺の抱える課題についても話してくださいました。「最近若い人のお寺離れが進んでいて、近寄りにくい印象を持つていたり、そもそもお寺に何をしに行ったらええかわからないという人もいたりします。もつとお寺を身近に感じてもらわないといけないですね」聞くと、七月にはヨガ教室のイベントをすでに企画しており、やがてはお寺でコンサートもしてみたいとおっしゃっていた。「有言実行」お寺もどんどん変わっているんだな感心した。



そんな了悟さんに「相棒」を尋ねてみると、「やっぱり地域の方々やね。古くからの檀家さんがこのお寺を支え



てくださいっているし、お寺の歴史を共に作り上げてきた先祖の代からのお仲間ですから。切っても切れない縁やね」と教えてくれた。取材に伺った日、たくさんのお檀家さんも集まっておられ、初対面の私たちにみんな笑顔でやさしく接してくれた。

やっぱり、イメージだけで先入観にとらわれてはダメなんだと改めて思った。今回の取材で「お寺」という所を、身近で温かい場所だと感じるこ

※今回広報まっばらに載らなかった写真部が撮影した写真は市ホームページで見ることが出来ます。

文 廣井和佳奈(二年)